

メルヴィルの『レッドバーン』

——貧困と死——

五十嵐 博*¹

Melville's *Redburn*

—— Poverty and Death ——

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Melville's partly autobiographical, first-person "I" fiction, *Redburn* deals with a green country boy's initiation into the sea voyage as a sailor and into the cold and vicious human world during hard times. As the story progresses and develops, however, the focus of the narration and description shifts from the boy's initiation process to what he is eventually initiated into, i.e. the cruel and abominable human world, coupled with utter misanthropy and downright hatred toward it, personified and embodied in the seamen's leader, Jackson.

The subject and theme of the book is not so much the initiation of the innocent boy into reality and evil as merciless reality itself facing destitution and evil reaction to it incarnated in Jackson. The author zooms in on cases of abject poverty by vividly depicting the miseries, vices, woes and deaths, witnessed among the beggars and poverty-stricken people in Liverpool and among the Irish emigrants plagued, literally, on board the ship back to America. Toward the end of the book, the plague and distress on the homeward-bound ship recede, followed by the demise of Jackson and his hate which brings about the deliverance of the sailors and "me."

1. はじめに——作品概観

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) の第4作『レッドバーン——初航海』(*Redburn: His First Voyage*, 1849) は、19歳から20歳になった頃の彼の体験と見聞をベースにした私小説風なフィクションとなっており、時代背景は1830年代の不況時代、舞台は、ハドソン川上流の村からニューヨーク→貨客船→リヴァプール、および近郊の田舎とロンドン→貨客船→ニューヨークと回る。

ストーリーは次のように展開する。——子供の頃に父を亡くした「私」ウェリンバラ・レッドバーン (Wellingborough Redburn) がハドソン川上流の小さな村からマンハッタンに出てきて、冷たい現実に接しながらニューヨークとリヴァプール間を往復する貨客船ハイランダー号 (*Highlander*) に見習い船員として乗り組み、古参船員ジャクソン (Jackson) をリーダーとする船首樓の船乗りの

世界で生活しながらリヴァプールに到着する。リヴァプールでは、父が使用した古いガイドブックを手に父親探しの心の旅をする。と同時に、ドック周辺に群がる極貧の最下層民の生き様に接する。そして、ある日、ハリー (Harry) という自分に似たイギリス人青年と知り合い、一緒にロンドンへ行った後、彼と共に帰航の途に就くが、その途上、リヴァプールで乗船した500名のアイルランド出国移民の間に疫病が発生して30人が死ぬ。ニューヨーク到着直前に疫病は終息し、ジャクソンが咯血しながらマストから落ち海中に没する。帰港後まもなく私は故郷の村に帰り、ハリーとは音信不通になるが、後に私が捕鯨船に乗り組んだ時に、ハリーも捕鯨船員になったがブラジル沖で捕鯨船と仕留めた鯨の間に落ちて死んだことを知る。

この作品の執筆途中でメルヴィルは、ロンドンの出版者リチャード・ベントリー (Richard Bentley) に宛てた手紙 (1849年6月5日付) の中で次のように、この第4作に言及している。

2009年3月31日受理

*1 東海大学海洋学部非常勤講師 (School of Marine Science and Technology, Tokai University)

「私は今、『マーディ』とは大きく異なる型のものを準備中です。分かりやすく、ストレートで、楽しませる話で、ある紳士の息子の船乗りとしての初航海における個人的体験談で、そこには形而上学も円錐曲線もなく、あるのはケーキとエールです。私は場所を南海から故郷の近くに移しました。私が書くことのほとんどは、コミカルな状況下で私が観察によって得たものです」。(I have now in preparation a thing of a widely different cast from “Mardi”:—a plain, straightforward, amusing narrative of personal experience—the son of a gentleman on his first voyage to sea as a sailor—no metaphysics, no conic-sections, nothing but cakes & ale. I have shifted my ground from the South Seas to a different quarter of the globe—nearer home—and what I write I have almost wholly picked up by my own observations under comical circumstances.)¹⁾

確かに『レッドバーン』は「分かりやすく、ストレート」で読みやすい。そして「コミカルな状況」は、物語の前半、特に往路の船上でしばしば出て来る。例えば、次の食後風景には誰しも思わず笑ってしまうか、微笑むかするであろう。

「船乗りたちはチェストの上にあぐらをかいて車座になり、とてもなごやかに、お互いの頭で硬いパンを割る。これはすごく便利なのだが、慣れるまでの少なくとも最初の4、5日間は私は頭が痛くなった。その後は余り気にならなくなったが、ただ髪がパンくずだらけになった。私は、いい櫛やブラシを持って来るのを忘れたので、毎晩、舷牆越しに風に向かって髪をよく振り払った」。(the sailors sitting cross-legged on their chests in a circle, and breaking the hard biscuit, very sociably, over each other's heads, which was very convenient indeed, but gave me the headache, at least for the first four or five days till I got used to it; and then I did not care much about it, only it kept my hair full of crumbs; and I had forgot to bring a fine comb and brush, so I used to shake my hair out to windward over the bulwarks every evening. — *Redburn*, Ch. 11, p. 55.)²⁾

しかし、物語の後半、リヴァプールのドック周辺に群がる乞食や極貧の最下層民の描写以降は、とてもとてもコミカルなどという状況にはない。そして、その結果、むしろ悲劇的な貧困状況が作品全体の基調となっている。読後、鮮烈な印象とともに読者の記憶に焼き付くのは、リヴァプールのドック傍の地下穴で餓死していく母娘の姿であり、アメリカへ渡るアイルランド出国移民たちの船内での窮乏生活である。

2. 開眼物語としての流れ

この作品は、世間知らずでナイーブな青年の開眼物語という流れで始まる。子供の頃から海、航海、異国へのロマンと憧れを抱きながら青年へと成長した「私」が、生活のために船に乗るべくハドソン川上流の故郷の村を離れるところから、「私」レッドバーンの開眼物語が始まる。開眼物語としての作品の流れの中で、重要な表象物が2つ出て来る。1つはモグラ皮製の狩猟用ジャケット、もう1つは総ガラス製の帆船で、いずれも物語の第1章に登場する。この2つの表象を視点として、この作品の開眼物語としての側面をとらえてみることにしよう。³⁾

2.1 モグラ皮の狩猟ジャケット——非洗練の表象

モグラの皮で作られた狩猟用ジャケットは、物語第1章の第1パラグラフに登場する。このジャケットは、「私」が初航海に出るべくマンハッタン南端の港に向けて村を出る前日の晩に兄からもらう品で、「私」にとってはとても大切なものなのだが、世間の目には、洗練されていない野暮ったさとみすぼらしさの表象に映るのである。

「私」は、このジャケットを着てニューヨークの街を歩き、船に乗り組み、ジャケットに付いている大きな角製のボタンから“ボタン”というあだ名で呼ばれながら大西洋を渡る。リヴァプール入港後、最初の日曜に「私」は、赤いシャツの上にこのモグラ皮のジャケットを着て、故郷の村で仕立ててもらったスポーツマン用パンタロンをはき、船乗りに防水帽をかぶった出で立ちで、亡き父が使った古いガイドブックを手には街に出る。まず警官に呼び止められ職務質問を受ける。さらに、この野暮ったくて変てこでみすぼらしい身なりのせいで、人々にじろじろ見られたり、避けられたりする。新聞社に入ってみようとする、「私」の汚れた狩猟ジャケットを一瞥した社員がドアをバシッと閉める。

「私」は父の影を追って街を歩き、半世紀前のガイドブックに載っている父が宿泊したホテルの所在を、通りを歩く紳士、淑女に尋ねるが、彼らは何も答えずに、私をじっと見て通り過ぎて行く。職工風の人が立ち止まって私の質問に答えてくれ、そのホテルはとうの昔に取り壊されたことを教えてくれる。父が泊まったホテルがもう存在しないことを目の当たりにした「私」は、それまでの「私」の内なる世界では聖なるバイブルのような存在だった父のガイドブックが、外の世界ではもはや役に立たなくなっているという現実を目を見開かされる。⁴⁾

6週間余のリヴァプール停泊中、「私」は同じ格好で街を歩き回る。半世紀前のガイドブックに載っている新聞社の建物を見つけて入ってみると、「まるで私が泥まみれの皮をまとった野良犬で、どぶの中から抜け出てこっそりとこの洗練された建物に入り込みでもしたかのよう」(as

if I were a strange dog with a muddy hide, that had stolen out of the gutter into this fine apartment – *ibid.*, Ch. 42, p. 208.) 追い出される。リヴァプール郊外の田園地帯に出かけてみるが、そこでも農夫に追い立てられて「世間の冷たい慈善心」(the cold charities of the world – *ibid.*, Ch. 43, p. 213.) を味わう。それでも最後には親切な農家でミルクとバター・マフィンをご馳走になり、その美しいイギリス娘に一目惚れするという経験をするが、このモグラ皮の狩猟ジャケットは、「私」の故郷の村では貴重で価値あるものではあっても、広い世間では忌避の対象であることを、そして世間は外見で人を判断することをレッドバーンは思い知らされるのである。

2.2 ガラスの帆船——ロマンと幻想の表象

物語第1章の最終パラグラフで語られる破損したガラスの帆船、亡き父がヨーロッパから買って来た、細部に至るまでガラスでできている帆船の模型が、「私」レッドバーンの心情のありようと物語の展開を暗示しており、したがって、この作品を理解するための鍵となっている。

「この船はまだ家にあるが、ガラスの円材や索の多くは今では砕けたり折れたりしている。しかし、修理に出すつもりはない。そして、船首像として付いていた縁反帽をかぶった雄々しい戦士が、船首下の破滅の海の波間に真っ逆さまに落ちたままになっている。だが、立ててやるつもりはない。私自身が独り立ちするまでは、彼と私の間には秘密裡に共鳴し合うものがあるから。しかも、姉や妹が言うには、彼が落ちこちたのは、この我がが初航海で海に出るべく私が出たまさにその日だった」。(We have her yet in the house, but many of her glass spars and ropes are now sadly shattered and broken,—but I will not have her mended; and her figure-head, a gallant warrior in a cocked-hat, lies pitching head-foremost down into the trough of a calamitous sea under the bows—but I will not have him put on his legs again, till I get on my own; for between him and me there is a secret sympathy; and my sisters tell me, even yet, that he fell from his perch the very day I left home to go to sea on this *my first voyage*. — *ibid.*, Ch. 1, p. 9.)

帆船に関するこのような叙述で物語第1章は終わるが、ガラスの帆船は何を意味しているのだろうか？当然これは、航海と異国に対する「私」の憧憬の表象であろう。そして、ガラスの波の上に落ちたガラスの戦士船首像は、幻想を抱いていた未開眼の「私」を表していると考えられる。したがって、作品冒頭に登場する壊れたガラスの帆船は、ロマンと幻想の瓦解を暗示しており、「私」のロマンチックな夢が醜悪な現実の認識に取って代わられること

を予示していると解釈できよう。

3. 登場人物

物語が進行するにつれて、ニューヨーク、往路の船内、リヴァプール、帰路の船内の各場面で、生き生きとして多彩な登場人物が出て来るが、その中で特に異彩を放っているのがジャクソンとハリーである。メルヴィルは、「私」以外の登場人物の中ではジャクソンとハリーの描写と叙述に最も多くの言葉を費やしており、ジャクソンはニューヨーク出港直後からニューヨーク帰港直前まで、ハリーはリヴァプールで、いわば忽然と登場してから物語の最後まで、いずれも断続的に語られる。

3.1 「私」とジャクソン——人間嫌悪

ジャクソンのモデルになった人間がいたにしても、⁵⁾ 作品中のジャクソンが発する言葉は作者メルヴィルの言葉であり、ジャクソンは、人間と世界に対するメルヴィルの1つの見方の具象化であり、作者自身の人間と人間世界に対する嫌悪と憎悪の化身であると筆者は解釈する。なぜなら、メルヴィルは「人間嫌い」という語をこの作品中で複数回使用しているが、いずれも「私」かジャクソンに関する叙述の中で使っているからである。「人間嫌い」は「私」とジャクソンの共通項であり、ジャクソンを理解するためのキー・ワードである。「私」とジャクソンを物語の中の別個の人格としてとらえるのではなく、作者メルヴィルの中にある「私」レッドバーンとジャクソンとして把握すると分かりやすい。⁶⁾

「人間嫌い」という語の使用を具体的に検証してみよう。メルヴィルは「人間嫌い」という語を、まず「私」に当てはめて3度使用している。破損したガラス船の描写で終わる物語第1章に続く第2章の冒頭でメルヴィルは、「冷たい世間と不況の時代」(a hardhearted world, and hard times – *ibid.*, Ch. 2, p. 10.) のせいで、

「若者の輝かしい夢はすべて消え、その若さで私は60歳の男のように野心を失っていた…世間は12月のように寒々としていて真冬の突風のように冷たいと当時の私には思えた。失望した少年ほど人間嫌いな者はいないが、逆境に鞭打たれて温かな魂をなくした私がまさにそうだった」(all my young mounting dreams of glory had left me; and at that early age, I was as unambitious as a man of sixty... Cold, bitter cold as December, and bleak as its blasts, seemed the world then to me; there is no misanthrope like a boy disappointed; and such was I, with the warm soul of me flogged out by adversity. — *ibid.*, Ch. 2, p. 10.)

と、「私」についての叙述で使用している。続いて「私」

の「ロマンチックで人間嫌い、厭世的な人生観」(romantic and misanthropic views of life – *ibid.*, Ch. 5, p. 23.)に言及して使用する。さらに、温かくもてなしてくれた兄の友人の家を出た後で「私」は「再び、やや人間嫌い、厭世的で自暴自棄な気持ちになって」(feeling somewhat misanthropical and desperate again – *ibid.*, Ch. 5, p. 24.)リヴァプール行きの船に向かう場面で使用している。このように物語の始まりの部分で3回も「私」の「人間嫌い」に触れているのである。

ジャクソンに当てはめて「人間嫌い」という語をメルヴィルが使用するのは、彼の病気が悪化し、寝床に閉じこもって激しく咳き込むようになり、彼の死が近づく物語の終局近くになってからである。

「じきにやって来る避けえない死を目の前にし、人間を嫌悪する彼 [ジャクソン] の魂は怒り狂ったようだった。サタンにその魂を売り渡したかのように、彼は歯をむき、呪いながら死ぬ決意をしているようだった」。(The prospect of the speedy and unshunable death now before him [=Jackson], seemed to exasperate his misanthropic soul into madness; and as if he had indeed sold it to Satan, he seemed determined to die with a curse between his teeth. – *ibid.*, Ch. 55, p. 276.)⁷⁾

「私」とジャクソンに対する使用に加えてメルヴィルは、さらに、船乗りたちがよく出入りするリヴァプールの最下層地区でうごめく者たちに対しても「人間嫌い」という表現を1度使用している。「悪徳と犯罪で腐臭を放って」(putrid with vice and crime – *ibid.*, Ch. 39, p. 191.)いるその地区にいる連中は「悪意ある行為のことごとくを人間に対して行おうとしている邪悪な人間嫌悪集団」(a company of miscreant misanthropes, bent upon doing all the malice to mankind in their power – *ibid.*)であり、「害虫のように業火で焼き殺されてしまうべき」(With sulphur and brimstone they ought to be burned out of their arches like vermin. – *ibid.*)だとメルヴィルは記述している。

ジャクソンは、しかし、「人間嫌い」ではあるが「私」と同様に悪者ではないし、犯罪者でもない。登場人物として肉付けされたジャクソンは、病に侵されてはいるが、船員たちのリーダー的存在として設定されている。リヴァプール上陸後、彼は「私」たちを先導して、夕食をとる宿へ行き、そして「彼はいつも食卓の上座についた」(He always sat at the head of the table – *ibid.*, Ch. 41, p. 205.)のである。年齢不詳で30歳にも50歳にも見える彼は、船員全員で探して見つけたわずかな量のタバコを全員に公平に分配するし、嵐の時には先頭に立って働く人間である。

にもかかわらず、ジャクソンの「人間嫌い」は人間憎

悪、人間呪詛にまで先鋭化されている。なぜか?異常なまでに否定的な人間観、人生観、世界観を彼が持つに至った原因や経緯を、メルヴィルは詳細にかつ明確には語らないが、彼が船員仲間たちに語る体験談の梗概を提示することによって示唆している。ジャクソンは、8歳の頃から船員として働き、「世界各地の最悪の場所で遊蕩と放埒の限りを経験した」(he had passed through every kind of dissipation and abandonment in the worst parts of the world. – *ibid.*, Ch. 12, p. 57.)と船員仲間たちに話し、アフリカ沿岸で乗り組んだポルトガルの奴隷輸送船内で見えた惨状と死を話し、アジア各地で遭遇した海賊、疫病、金銭目当ての毒殺などの醜悪な体験談を語る。

「私」レッドバーンは、この初航海で初めて異国を見て、アイルランドと英国がアメリカとほとんど変わらないことを知っただけだが、ジャクソンは「私」よりも遙かに数多くの地へ航海し、世界中を見てきた。「私」は世間知らずのいなか者が抱く期待を裏切られただけだが、ジャクソンは世界に幻滅しきっている。「私」は、自分より遙かに悲惨な状況に置かれている貧民や移民を見たが、ジャクソンは、金儲けのために死体を利用するような人間まで見てきた。

ニューヨークへ帰航する船がリヴァプールを出港直後、泥酔状態で乗船した新乗組員の1人が燐光を発生しながら死んでいるのが発見されたが、ジャクソンは、金目的の周旋屋が泥酔状態を装って死体を運び込んだと言う。そして「前にも同じことが行われたのを知っているとジャクソンは言った」(I heard Jackson say, that he had known of such things having been done before. – *ibid.*, Ch. 48, p. 245.)のである。

「私」は人間嫌いになっただけだが、ジャクソンの人間嫌いは人間憎悪にまでなっている。メルヴィルは「私」レッドバーンの口を通して、

「彼 [ジャクソン] は、この世界のすべてのもの、すべての人間を憎悪しているようだった。まるで世界全体が1人の人間であるかのように。そしてその世界が彼に酷い危害を加え、その傷が彼の心の中で疼いているようだった」(He [=Jackson] seemed to be full of hatred and gall against every thing and every body in the world; as if all the world was one person, and had done him some dreadful harm, that was rankling and festering in his heart. – *ibid.*, Ch. 12, p. 61.)

と語るが、ジャクソンは第6作『モーヴィ・ディック——鯨』(*Moby-Dick; or, The Whale*, 1851)でのエイハブ(Ahab)の原型ないし試作品のようである。エイハブの憎悪の対象は白鯨に象徴化されるが、ジャクソンの憎悪の対象である人間と人間世界には何の直喩も隠喩も使用されておらず、直截で分かりやすい。

ジャクソンの、つまりメルヴィルの中にあるジャクソンの視点からの人生観と世界観は、ニューヨークを出港したハイランダー号がニューファンドランド沖で難破船の傍らを通りかかるときに明らかにされる。難破船の船尾手すりに寄りかかる3つの死体を見て、「連中の魂は喜望峰よりも遠いところにいる」(“dar souls are farder off dan de Cape of Dood Hope.” — *ibid.*, Ch. 22, p. 104.) というオランダ人船員マックス (Max) に対して、

「喜望、喜望」とジャクソンは、かん高い声を上げ、ぞっとするようなにや笑いを見せて、オランダ人の口調を真似ながら“あいつらに喜望はない。あいつらは溺れ死んだのだ。赤マックスよ、おまえもおれも、いつの日かの暗い夜にそうなるようにだ”と言った」(“Dood Hope, Dood Hope,” shrieked Jackson, with a horrid grin, mimicking the Dutchman, “dare is no dood hope for dem, old boy; dey are drowned and d d, as you and I will be, Red Max, one of dese dark nights.” — *ibid.*, Ch. 22, p. 104.)

のである。さらに、ジャクソンは別の船乗りに向かって「天国なんてことをおれに言うな。そんなのは嘘だ。おれは知っている。天国なんてものを信じるやつはみんなバカだ」(“Don’t talk of heaven to me—it’s a lie—I know it—and they are all fools that believe in it.” — *ibid.*, Ch. 22, p. 104.) と言う。

この会話に続けてメルヴィルは、ジャクソンという存在の真髓を、次のように文言化している。

「彼は教会の礼拝に出たことはなく、マレーの海賊同様、キリスト教については全く何も知らなかったし、文字も読めなかったが、それでも、おのずと、無神論者で反キリスト教徒になっていた。そして長い夜間の見張りの当直時には私たちに對して、この広い世界に信ずべきものは何もない、愛すべきものは何一つない、そのために生きる価値のあるものは一つとしてない、すべては憎悪の対象であることを立証しようとした」。(Though he had never attended churches, and knew nothing about Christianity; no more than a Malay pirate; and though he could not read a word, yet he was spontaneously an atheist and an infidel; and during the long night watches, would enter into arguments, to prove that there was nothing to be believed; nothing to be loved, and nothing worth living for; but every thing to be hated, in the wide world. — *ibid.*, Ch. 22, p. 104.)

醜悪で悲惨な人間世界を見てきたジャクソンの人間観、人生観、世界観は明快である。要約すれば——この人間世界に希望はなく、愛も信も存在しえない。生きる意味はな

く、あるのは死のみで、天国など存在しない。神はいない。——すなわち、メルヴィルがジャクソンに付与している姿勢は、「コリント人への第一の手紙」13章の思想の完全否定である。

ジャクソンが人間世界に対して憎悪のかたまりと化すに至った背景には、彼なりの悲しい理由と事情があることを、メルヴィルは「私」レッドバーンの口を通してこう示唆している。

「この男は邪悪さよりも悲哀を抱えているように思えた。彼の邪悪さの源は彼の悲しみにあるようだった。おぞましい彼の目に、時折、言いようもなく哀れで胸を打つものが見えた。このジャクソンを私は憎悪しそうになった時もあったが、それでも私は、他の誰に対してよりも彼を憐れんだ」。(there seemed even more woe than wickedness about the man; and his wickedness seemed to spring from his woe; and for all his hideousness, there was that in his eye at times, that was ineffably pitiable and touching; and though there were moments when I almost hated this Jackson, yet I have pitied no man as I have pitied him. — *ibid.*, Ch. 22, p. 105.)

ジャクソンに対して哀れを誘う場面が1箇所ある。密航者として船内にもぐりこんでいた孤児で6歳のイギリス人少年にまつわる挿話中で、ジャクソンも元々は愛とやさしさに満ちた人間だったであろうと思わせる次の叙述中の場面である。

「最初ジャクソンは、いろいろとその子の面倒を見て仲良くしようとしたが、その子はいつもジャクソンを怖がったので、ついにはジャクソンは傷つき、その子に話しかけなくなり、世界の他のすべてとともに、無害なその子をも憎んだようだった」。(in several ways he at first befriended this boy; but the boy always shrunk from him; till, at last, stung by his conduct, Jackson spoke to him no more; and seemed to hate him, harmless as he was, along with all the rest of the world. — *ibid.*, Ch. 23, p. 113.)

そして、登場人物として肉付けされたジャクソンの人間性をメルヴィルは非常に意地悪いものに形成している。例えば、アメリカ到着を心待ちにしているアイルランド出国移民の単純無知を弄ってからかう場面がある。船から見たアイルランド南西部の岬をアメリカと思って「あれか?」(“Is that it?” — *ibid.*, Ch. 51, p. 259.) と尋ねる移民に、「そう、古きアイルランドのようには見えないよなあ?」(“Aye, it doesn’t look much like *ould* Ireland, does it?” — *ibid.*) と返答してみたり、あるいは、船がなかなかアメリカに到着しないので不安に駆られている移民

たちの間に、移民たちは奴隷として北アフリカに売られようとしているなどという噂を流す。

また、アイルランド人移民の子が、船首楼での船員たちの食事風景を覗き見て「ママ！ママ、来て見て！船員たちが家の豚みたいに、ちっちゃな飼いや桶から食ってる」（“Mammy! mammy! come and see the sailors eating out of little troughs, just like our pigs at home.” – *ibid.*, Ch. 57, p. 283.）と叫ぶと、ジャクソンは「豚だと？このごくつぶしどもめ、おまえらが、おれたちの飼いや桶から食いたがる日がもうすぐ来る！」（“Pigs, is it?—and the day is close by, ye spalpeens, when you’ll want to be after taking a sup at our troughs!” – *ibid.*）と「悪意に満ちた予言」（malicious prophecy – *ibid.*）をし、そしてその予言どおりになる。

ジャクソンの目は数回、蛇に喩えられている。「蛇のような目が、赤い眼窩の中でぐるぐる動いていた」（His snaky eyes rolled in red sockets. – *ibid.*, Ch. 55, p. 275.）とか「彼の青い眼窩は蛇の巣窟のようだった」（the blue hollows of his eyes were like vaults full of snakes. – *ibid.*, Ch. 59, p. 295.）といった具合である。蛇は当然、善悪を知る木の実をイヴとアダムに食べさせ、人間を開眼させた園の蛇であろう。この作品中にはアダムとイヴへの言及が一度あり、メルヴィルはドックの乞食たちが「彼らの祖先である園のアダムとイヴのように健康で健全」（healthy and whole as their ancestors, Adam and Eve, in the garden – *ibid.*, Ch. 38, p. 188.）になることを祈っている。

ジャクソンは、冷酷、邪悪な真実を抉り出す人間であり、世間知らずの「私」に悪を見せつける、いわば園の蛇のような存在である。

3.2 「私」とハリー——「私」の中のハリー

ハリーという登場人物は物語の後半、「私」がリヴァプール郊外の田園地帯でイギリス娘に一目惚れした日の翌日に、忽然と作品に現れ、「私」の相棒となって物語の最後まで行動を共にする。そして作品の最終ページで、ハリーらしきイギリス人青年が捕鯨船と仕留められた鯨の間に船上から落ちて死んだ話を聞いた「私」が、その青年の名前を尋ねると、「ハリー・ボルトンは、おまえさんの兄弟じゃなかったのか？」（“Harry Bolton was not your brother?” – *ibid.*, Ch. 62, p. 312.）という問いが返ってくる。

ハリーという人物設定にモデルとなった人物がいたとしても、彼と「私」との間の類似点と相違点を考慮すると、ハリーは「私」の兄の分身、もう1人の兄であるかのようにも、⁸⁾あるいは「私」の分身、もう1人の「私」であるようにも思える。

「私」とハリーとの間には共通点が多い。まず、2人とも「紳士の息子」である。この作品のサブタイトルの一部として「見習い船員として商船に乗り組んだ紳士の息子の

告白と回想」(Being the Sailor-boy Confessions and Reminiscences of the Son-of-a-Gentleman, in the Merchant Service) と記されているように、「私」レッドバーンは「紳士の息子」であり、ハリーも「彼は紳士の子息だった」(he was a gentleman’s son – *ibid.*, Ch. 62, p. 312.) のである。そして2人とも父親を亡くして、貧しく、友なく、放浪癖を持っている。さらに「私たちの身体のサイズはほぼ同じだった。私のほうが少し太めなだけだった」(we were about the same size—if any thing, I was larger than he. – *ibid.*, Ch. 45, p. 225.) のである。

相違点は、「彼は私より数歳年上だった」(he was some years my senior – *ibid.*) こと、そして彼が非常に女性的なことである。高所恐怖症のためマストに昇れないハリーは、日中は船員たちの嘲笑と侮蔑の対象となるが、美声の持ち主だったため、夜の見張り当直時には、彼に歌ってくれと船員たちはリクエストする。

またハリーは、私とは異なり、金遣いが荒く、放蕩の象徴的存在のようになっている。彼は「私」を連れて汽車でロンドンへ行き、酒と賭博の「アラジン宮殿」(Aladdin’s Palace – *ibid.*, Ch. 46, p. 231.) で賭け事をして負け、「私」は賭け事はしないが神秘的で夢幻の中にいるような一夜を過ごして帰ってくる。

メルヴィルは、ハリーを初めて物語に登場させる時に、彼の容姿を次のように、きわめて女性的に描いている。

「彼は小柄だが完璧な姿態に、巻き毛の髪と絹のような筋肉を併せ持ち、繭に包まれて生まれて来たようだった。血色のよいブルーネットの顔色は女の子のようで、小さな足に白い手、そして大きくて黒い、女のような目をしていて。詩的比喩は抜きにして、彼の声はハーブの音色のようだった」。(He was one of those small, but perfectly formed beings, with curling hair, and silken muscles, who seem to have been born in cocoons. His complexion was a mantling brunette, feminine as a girl’s; his feet were small; his hands were white; and his eyes were large, black, and womanly; and, poetry aside, his voice was as the sound of a harp. – *ibid.*, Ch. 44, p. 216.)

メルヴィルはさらに、「女の子のような若者」(the girlish youth – *ibid.*, Ch. 50, p. 253.), 「女っぽい容姿」(his effeminacy of appearance – *ibid.*, Ch. 50, p. 257.), 「ハリーの手はレディーのようだった」(Harry’s hand was lady-like looking – *ibid.*, Ch. 56, p. 281.) というふうな、彼の女性的な側面を繰り返して強調している。

ハリーは一体何なのか？作品における彼の存在理由は何なのか？メルヴィルは、

「けどハリー！きみは、千の奇妙な姿が入り混じって

いる空想のケンタウロスだ。半分現実で人間、半分途方もなく異様だ」(But Harry! you are mixed with a thousand strange forms, the centaurs of fancy; half real and human, half wild and grotesque. — *ibid.*, Ch. 50, p. 252.)

と叙述しているが、一体どんな空想からこのような異様な登場人物を生み出したのか？

モーム (W. Somerset Maugham, 1874-1965) はメルヴィルが「抑圧されたホモセクシャル」(a repressed homosexual)⁹⁾ だったと推断している。その通りかもしれない。ホモセクシャルもしくはバイセクシャルの性向が多少ともあったのかもしれない。アイルランド出国移民に混じって乗船したカルロ (Carlo) という、せいぜい15歳ぐらいという設定のイタリア人少年の描写においてもメルヴィルは「膝から下のむき出しの脚は、淑女の腕のように美しかった」(From the knee downward, the naked leg was beautiful to behold as any lady's arm. — *ibid.*, Ch. 49, p. 247.) と表現しており、そこには少年愛のようなものも感じ取れる。

あるいは、「私」が美しいイギリス娘に対して即結婚したいと思うほどに一目惚れした直後にハリーが忽然と物語に登場したことから推量すると、ハリーは、自分のものとするのができなかった美しいイギリス娘の身代わり、代替だったとも考えられる。カルロという少年も同様である。

アメリカ人の「私」、イギリス人のハリー、イタリア人のカルロの3人には、父親を亡くし、貧しく、友もなく、放浪するという共通項がある。メルヴィルは「私」の口を通して「私たちは皆、愛ではないにしても共感を求める」(all of us yearn for sympathy, even if we do not for love — *ibid.*, Ch. 56, p. 278.) と述べ、「[私は] 若くはあったがすでに悪運の中で粉々に打ち砕かれていたので、私と似た状況にある人に共感できた」([I], young though I was, had been well rubbed, curried, and ground down to fine powder in the hopper of an evil fortune, and... therefore could sympathize with one in similar circumstances. — *ibid.*, Ch. 56, p. 279.) と語っている。「私」は父に死なれたから、人の死の痛みが分かる。「私」は孤独で無一文になったことがあるから、ハリーやカルロに共感できる。「私」はニューヨークでハイランダー号に乗船した当日、無一文で水しか飲んでおらず飢餓に等しい極度の空腹状態を経験したので、人の飢餓が推し量れる。

ハリーおよびカルロの身体の女性的な描写には、美しいイギリス人娘に対して果たすことができずに抑圧された「私」の性的願望が、ハリーとカルロへの心情的共感とないう交ぜになって表出しているのかもしれない。

4. 貧困と死

この作品でメルヴィルは「貧しい」(poor), 「一文無し」(penniless), 「友なし」(friendless) という形容詞を繰り返し「私」とハリー、カルロに当てはめて使用している。まるで貧困がこの作品におけるメルヴィルの追求対象であるかのように、「私」自身の貧しさ、リヴァプールの最下層民の極貧状況、そしてアメリカへ渡る移民の赤貧ぶりが詳細に描出されている。『レッドバーン』の主題は、冷酷な現実と悪に対する開眼というより、貧困とジャクソン、すなわちジャクソンに人格化されている人間世界に対する嫌悪と憎悪であろう。¹⁰⁾

4.1 貧困の諸相

貧困と冷酷な現実が、ニューヨーク、リヴァプール、船内の3場面のいずれでも迫真性と説得力を持って描出されている。

4.1.1 質屋

物語が始まって以降、「私」以外の貧しき人々が最初に描出されるのはニューヨークの質屋においてである。

故郷の村からマンハッタンに出てきた「私」は、船に乗り組むための衣服等を買うために兄からもらった鳥撃銃を質に入れるが、そこで「私」が目にするのは、フライパン、パイプ、赤ん坊用衣類などを質入れに来ている人々、指輪を質入れに来て泥棒扱いされる青年であり、そして金銭とビジネスに対して狡猾なユダヤ人質店主である。

リヴァプールのドック隣接地区の酒場通りにも酒場と提携してビジネスを営む質屋がたくさんあり、彼らが船乗り相手の商売をしていることを語るメルヴィルは、金を騙し取ろうとして寄って来るドック周辺の乞食連中を「彼らはユダヤ人か質屋のように、あなたに目を光らせる」(they glitter upon you an eye like a Jew's or a pawnbroker's. — *ibid.*, Ch. 40, p. 194.) と形容し、質屋を「悪党」(knaves — *ibid.*, Ch. 40, p. 195.) と呼んでいる。

4.1.2 リヴァプール貧民地区

リヴァプールではメルヴィルは、19世紀前半の、しかも不況時代の英国の最下層社会の有様を描出している。

労働者階級と貧しい英国人、およびアイルランド人が住む地区に入り、「何万という、ぼろをまとった人々」(tens of thousands of rags and tatters — *ibid.*, Ch. 41, p. 201.) の群れの間を歩く「私」は、

「貧困、貧困、そして貧困が果てしなく続く。これら惨めな通りを、窮乏と悲哀が腕を組んで、よろよろと歩いていた」(Poverty, poverty, poverty, in almost end-

less vistas: and want and woe staggered arm in arm along these miserable streets. — *ibid.*, Ch. 41, p. 201.)

と語る。

ドック周辺では、一日中ゴミあさりをしている老婆たち、報酬目当てに早朝、死体を捜してドックを覗きまわると、おぞましき飢えた老人、老婆たちが描き出される。そして、船乗りたちが昼食をとりに出て来る時間になると、ドックの壁沿いに物乞いに集まって立ち並ぶ老若男女の乞食の群れを仔細に描くメルヴィルは、この有様を「文明と人間社会にとって不名誉な」(dishonorable to civilization and humanity — *ibid.*, Ch. 38, p. 186.) もの、「この世の悲しみの光景」(the sight of the world's woes — *ibid.*, Ch. 38, p. 188.) と呼んでいる。

最も痛ましい光景は、ドック近くの古い倉庫が立ち並ぶ路地で目撃される。そこには、崩れかけた古い倉庫の地下穴で餓死していく母娘が描き出される。死んだ赤ん坊を抱きかかえる女の両側に、小さな女の子が2人、寄りかかっている。そして誰も助けようとしなない。¹¹⁾

「このような光景が目に見える時に、世界広しと言えども一体誰に、にこにこ笑って、喜んでいる権利があるのだろうか？それは心を憎悪に向かわせ、ハウードのような博愛家を人間憎悪者に変えるのに充分だ」(What right had any body in the wide world to smile and be glad, when sights like this were to be seen? It was enough to turn the heart to gall; and make a man-hater of a Howard. — *ibid.*, Ch. 37, p. 181.)

と「私」は語る。メルヴィルは、この「人間憎悪者」の典型としてジャクソンという登場人物を形成したと解釈してよからう。

4.1.3 移民船

19世紀前半、ヨーロッパから大量の、いわば経済難民が移民となってアメリカ大陸や新オランダ (New Holland, 現 Australia) へ流入した時代の移民船の悲惨な実態をメルヴィルは詳細に創出し描出している。リヴァプールのドックに停泊中の船内で毎晩聖歌を歌う数百名のドイツ人出国移民集団も紹介されているが、詳細に語られるのは、帰りのハイランダー号に乗船してきた500人のアイルランド出国移民である。

彼らは、犬小屋のような寝床が急ごしらえで側面に据え付けられた狭い船倉にすし詰め状態になって航海する。暴風雨に遭遇して船倉に閉じ込められた500名の移民たちは糞尿汚物を船外に棄てることができなくなり、疫病が発生する。終息するまでの8日間で、移民28名と乗組員1名が疫病に感染して死亡し、船室乗客婦人1名がショック死する。

船内の苛酷で悲惨な状況を描出した後でメルヴィルは、

「私たちは文明化された身体に野蛮な魂を併せ持っているのかもしれない。私たちはこの世の現実の光景を認識できず、その声を聞くことができず、その死に対して死んだように無感覚である」(We may have civilized bodies and yet barbarous souls. We are blind to the real sights of this world; deaf to its voice; and dead to its death. — *ibid.*, Ch. 58, p. 293.)

と結んでいる。

4.2 死

この作品には多くの死が発生する。発生順に羅列すると、1) 「私」の父、2) ニューヨーク出港直後の泥酔船員の自殺、3) ニューファンドランド沖の難破船の3つの死体、4) リヴァプールのドック付近の地下穴の母娘、5) リヴァプール出航時に周旋屋が運び入れた補充船員、6) 船内で発生した疫病による死者30名、7) ジャクソン、8) ハリー、である。これらの死は何を意味するか？

「私」の父の死は、「私」の貧困と悲しみの根本原因である。

ニューヨーク出港直後の死は不思議な状況下で発生する。泥酔状態で運び込まれて船首楼の私の寝床で寝ていた船乗りが、真夜中に目を醒まし、譫妄状態の中で錯乱して金切り声を上げながら甲板に出て来て海に飛び込んで死んだ。彼は「私」の寝床で寝ていたのであり、しかも船首から海に飛び込んで死んだのである。これは、「私」が故郷の村の家を出た日にガラスの波の上に落ちたガラスの戦士船首像を想起させる。この泥酔船員の死は、世間と船と航海に対して「私」が抱いていた幻想の死を意味しているのではなからうか？幻想が消えたから、「私」はこの航海を「不吉な航海」(an ill-omened voyage — *ibid.*, Ch. 10, p. 51.) と呼び、奴隷のようにこき使われる船上生活が始まると、「この忌まわしい航海がさっさと終わる」(a speedy end to this abominable voyage — *ibid.*, Ch. 13, p. 66.) ことを願うのである。

ニューファンドランド沖の難破船の3つの死体は何か？作者は3つの死体の意味を知っているのかもしれないが、それを推理するための確たる手がかりは読者にはない。ただ、難破船を見たジャクソンは「私」に向かって「あれを見ろ。あれが船乗りの棺だ」(“look there; that’s a sailor’s coffin.” — *ibid.*, Ch. 22, p. 104.) と言う。それまではロマンチックな幻想を抱いていた「私」が難破船の死体を見て、船と船乗りの悲惨な現実に開眼したことは確かである。

リヴァプールのドック付近の地下穴の母娘の死は、貧窮と悲しみの極みの具象化としてとらえることができよう。

リヴァプール出航時に周旋屋が運び入れた補充船員は隣

光を発しながら死んでおり、その有様が描出される章は「生ける屍」(*A Living Corpse*)と題されている。この題名から推測すると、この死は、リヴァプール滞在中に地下穴の母娘の死に代表される悲惨で冷酷な現実と接した「私」の心の死を代弁しているのではなかろうか？

船内で発生した疫病による死者30名は、悲惨で冷酷な現実のもう1つの代表例としての意味を持つ。

ジャクソンは、ニューヨーク帰港直前に、衆人環視の中で、風をはらむ白帆に大量の咯血をしながら、帆桁から真っ逆さまに海に落ちて消える。疫病が終息したように、ジャクソンの人間世界に対する憎悪と呪詛も終息する。「彼[ジャクソン]の死は、彼ら[船員たち]の解放を意味した」(*his [=Jackson's] death was their [=the sailors'] deliverance — ibid., Ch. 59, p. 297.*)と「私」は語るが、「解放」は作者メルヴィル自身にも当てはまることである。ジャクソンの現実認識は作者メルヴィルの現実認識の重要な一部であり、ジャクソンの死は、人間世界に対する憎悪からのメルヴィルの心の脱却を意味すると考えられる。メルヴィルは自らの内にある憎悪を文字化し有形化し、作品中に吐き出して、その憎悪から解放されたと解釈してよからう。

頭から真っ逆さまに海に落ちたガラスの戦士船首像が表すものは、ロマンチックな幻想を抱いていた「私」であり、人間世界を憎悪するジャクソンであり、さらに、女の子のように華奢なハリーでもある。作品の最終ページで明らかにされる「私」の相棒ハリーの死は、「私」の中にあるガラスのような脆弱さとの訣別を意味し、この苛酷な現実世界を生き延びようとする「私」の意志の表明となっている。

5. おわりに——「金のために」、そして『モービー・ディック』への叩き台として

この作品に対する作者自身の評価は非常に低い。『レッドバーン』がロンドンで出版されてから1週間後、岳父レムエル・ショー (Lemuel Shaw) に宛てた手紙 (1849年10月6日付) の中でメルヴィルは「『レッドバーン』に対しては私は特にどんな評価も期待していません。まあまあ楽しめる本と思われるかもしれませんが、つまらないと思われるかもしれません」(For Redburn I anticipate no particular reception of any kind. It may be deemed a book of tolerable entertainment;—& may be accounted dull.)¹²⁾と作品に言及し、「『レッドバーン』に続いて執筆し脱稿したての『白ジャケット——軍艦内の世界』(*White-Jacket; or The World in a Man-of-War*, 1850)にも触れて、「この2冊は、金のためにした2つの仕事です。他の人たちが仕事で木を挽くように、必要に迫られてやった仕事なのです」(They are two jobs, which I have done for money—being forced to it, as other men are to

sawing wood.)¹³⁾と述べている。また『白ジャケット』の出版交渉のために訪れたロンドンで *Blackwood's Edinburgh Magazine* の長い『レッドバーン』書評を目にしたメルヴィルは「著者である私が『レッドバーン』は屑だと分かっており、しかもタバコを少し買うために書いたものだ」(I, the author, know [*Redburn*] to be trash, & wrote it to buy some tobacco with.)¹⁴⁾と日誌 (1849年11月6日付) に書き残している。さらに、エヴァート・A・ダイキンク (Evert A. Duyckinck) に宛てた手紙 (1849年12月14日付) には、「『レッドバーン』は(多少)驚いたことに、好評のようです。これはうれしいことです。空っぽの財布にお金を入れてくれるのですから。けど、こうした本を二度と書かなくてすみますように」(the book Redburn... to my surprise (somewhat) seems to have been favorably received. I am glad of it—for it puts money into an empty purse. But I hope I shall never write such a book again.)¹⁵⁾と書いている。

このようにメルヴィルは「金のために」やむを得ず書いたと言っているが、「金のために」書いたということは、プロの作家として一般読者向けに書いたということである。しかも彼は1849年の春から夏にかけてのわずか4~5ヶ月の間にマンハッタンの住居で『レッドバーン』と『白ジャケット』を立て続けに書き上げている。メルヴィルの姉妹や妻がコピーリストとして原稿を清書していたことを考慮に入れても、驚異的なスピードと集中力を持って書かれたと言ってもよい。

さらに彼は二度とこのような本は書きたくないと言っているが、『レッドバーン』を書いた翌年には、「私」レッドバーンを「私」イシュメイルに成長させ、ジャクソンをエイハブに進化させて、直截な表現と語りを象徴的な現象と行動に変えた『モービー・ディック』を執筆している。『レッドバーン』でメルヴィルは初めて「私」をイシュメイルに喩えた。見習い船員としてハイランダー号に乗船した当初、船員のリーダー格のジャクソンに敵意を抱かれ、その結果、他の乗組員たちからも距離を置かれることになった「私」レッドバーンは「私は船内でイシュメイルのような存在になった。一人の友も仲間もなく」(I found myself a sort of Ishmael in the ship, without a single friend or companion. — *Redburn*, Ch. 12, p. 62.)と述懐する。そして『モービー・ディック』のナレーションを「私をイシュメイルと呼んでくれ」(Call me Ishmael. — *Moby-Dick*, Ch. 1, p. 1.)¹⁶⁾で開始するのである。つまりメルヴィルは『レッドバーン』を叩き台にして『モービー・ディック』を書いたのである。したがって『モービー・ディック』をより深く理解するためにも、そしてメルヴィルという人物と彼の作品群総体を理解し、彼が遺した言葉の意味と価値を認識するためにも『レッドバーン』は当然、読む必要がある。

註

- 1) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale University Press, 1960), p. 86.
- 2) 『レッドバーン』のテキストは Herman Melville, *Redburn: His First Voyage* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1969) を使用し、引用には章と頁数を付した。
- 3) マイナーなイニシエーションとして、世間知らずで品行方正な小人の世界から大人の世界へ入る「私」が初体験するものに、酒とタバコがある。見習い船員として船に乗り組みニューヨークを出港して数日後、船長に対してなれなれしく挨拶をしてその逆鱗に触れるなど、「海の慣行に対する無知」(my ignorance of sea usages – *Redburn*, Ch. 14, p. 69.) をさらけ出す「私」に対して一等航海士は「お前は未熟そのものだ…俺が大人にしてやる」(“You are very green... but I’ll ripen you.” – *ibid.*, Ch. 14, p. 70.) と言う。そして一人前の船乗りへと成長していく過程で「私」は酒とタバコを初体験する。

飲酒については、「私は酒を飲むことに対して良心の咎めを感じた…私は母の住む村の青少年完全禁酒協会のメンバーだった」(I had some scruples about drinking spirits... I was a member of a society in the village where my mother lived, called the Juvenile Total Abstinence Association – *ibid.*, Ch. 8, p. 42.) と語る「私」は、船酔いを解消するために勧められた酒を飲んでみると酒が船酔いに効くことが分かり、これがきっかけで酒を多少飲むようになる。また「私は、村の日曜学校の校長が禁酒協会と一緒に組織した禁煙協会のメンバーだった」(I was a member of an Anti-Smoking Society that had been organized in our village by the Principal of the Sunday School there, in conjunction with the Temperance Association. – *ibid.*, Ch. 9, p. 46.) が、船乗りたちが皆吸うので、「私」もタバコを吸うようになる。

このようにメルヴィルはキリスト教会活動と連動した禁酒と禁煙の姿勢に触れているが、その後メルヴィルが飲酒や喫煙に対して良心の咎めを感じていた痕跡は見当たらない。『レッドバーン』に続けて書き上げた『白ジャケット』の校正刷りを持ってロンドンへ出版交渉に出かけた際の1849年10月から12月末の日誌(Herman Melville, *Journal 1849-50* [Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1989], pp. 3-48) を読むと、メルヴィルは毎日のように他の人たちと一緒にビールやワインやブランデーを飲み、頻繁にシガーを吸っていたことが分かる。

- 4) 父親探しの旅は、「私」の現実に対する開眼の一道程としてあるが、作品のテーマとはなっていない。
- 5) ハイランダー号のモデルとなったセント・ローレンス号(*St. Lawrence*)にはロバート・ジャクソン(Robert Jackson)という名の乗組員がいて、リヴァプール停泊中に彼は一旦船から脱走したが、ニューヨークへ帰航する前に船に戻ったとの記録が残っている。ニュートン・

アーヴィンは、ジャクソンのモデルになったと考えられるこの同姓の人物について『レッドバーン』のハイランダー号にジャクソンという名の船員がいるように、セント・ローレンス号にはジャクソンという名の船員がいた。彼が帰航途中で死ぬことはなかったが、実際のジャクソンがフィクションの中のジャクソンと同様に凶暴で、威張り散らし、冷酷な人間嫌いで、邪悪な性格だったことは想像に難くない」(There was... a sailor named Jackson on the *St. Lawrence*, as there is a sailor named Jackson on the *Highlander* in *Redburn*; it is true that he did not die on the voyage home, but one has no difficulty in imagining that the real Jackson was as ferocious a bully, as cruel a misanthrope, and as depraved a character generally as the fictional one. – Newton Arvin, *Herman Melville* [New York: The Viking Press, 1950], p. 40) と推量している。

- 6) ローランス・トンプソンは、ジャクソンという登場人物をメルヴィルとは別個の人格としてとらえた上で、「メルヴィル自身はジャクソンとの間に共通の絆を感じている。双方とも経験によって傷つき、苦々しい思いをしているからだ。そしてメルヴィルがジャクソンに対してほとんど憎悪と言える感情を抱いているとしたら、彼は彼自身の内にある性質をほとんど憎悪しているのである」(Melville himself feels a common bond with Jackson because each is scarred and embittered by experience. And Melville, if almost hating Jackson, is almost hating a quality in himself. – Lawrence Thompson, *Melville’s Quarrel with God* [Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952], p. 88) と推察し、ジャクソンと同質のものをメルヴィルは自らの内に抱えているという解釈の仕方をしている。
- 7) [] 内の語は筆者が補った。以下同じ。
- 8) 『レッドバーン』執筆の3年前に、アメリカ公使付きの書記官としてロンドンで勤務していた兄のギャンズヴォート(Gansevoort Melville, 1815-1846)が、結核性髄膜炎を患って死去した。
- 9) W. Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (London: Vintage, 2001), p. 214.
- 10) アーヴィンは「この本の表面的主題は若者の平水夫としての初航海であり、内面的主題はイノセンスの悪への開眼である」(The outward subject of the book is a young boy’s first voyage as a sailor before the mast; its inward subject is the initiation of innocence into evil. – Newton Arvin, *Herman Melville* [New York: The Viking Press, 1950], p. 103) と手短かに概括したが、これに対してR. W. B. ルイスは『レッドバーン』における重点はたぶん、青年自身に起きることよりも、彼とは無関係にこの世に存在するものとして明らかにされる悲惨と腐敗とに置かれている」(the emphasis in *Redburn* is perhaps less upon what happens to the boy himself than upon the wretchedness and depravity that are uncovered as existing independently of him in the world. – R. W. B. Lewis, *The American Adam* [Chicago and London: The University of Chicago

Press, 1955], p. 136) と指摘した。さらに、ワーナー・バーソフは「『レッドバーン』は“開眼”小説と言われているが、私にはそのような印象を与えない。この作品のヒーローの経験は深くは語られていない」(it [= *Redburn*] does not, I think, make its impression as a novel of “initiation,” as has been claimed; its hero’s experience is simply not given to us in sufficient depth. —Warner Berthoff, *The Example of Melville* [New York: The Norton Library, 1972], p. 32) という判断を述べている。

アーヴィンのコメントがこの作品の概略的・表層的解釈であるのに対して、ルイスとバーソフの解釈は一步踏み込んだものとはなっている。しかし『レッドバーン』の主題は、筆者が本論で述べているように、貧困がもたらす悲惨で醜悪な現実であり、加えて、そうした現実を生み出す人間世界に対する嫌悪と憎悪であろう。

- 11) 地下穴で餓死していく母娘が描出される場面を取り上げて、ロナルド・メイソンは「ディケンズでさえ500ページを費やしてもできなかったであろうことをメルヴィルは5ページ分の静かな叙述で行っている。彼は人間の髓を熱い憐憫の情と怒りでかき乱すと同時に、恐怖で凍りつかせそうにする。無慈悲な産業主義の冷淡さに抗議する19世紀文学にはこのような叙述がたくさんあり、その大いなる人道主義の時代に、怒れるリアリズムの一章を書かなかった人道的作家はまずいないが、私はメルヴィルのこの叙述をそれらすべての中のトップの地位に位置づける」(Melville does in five pages of quiet narrative what even Dickens could not have done in five hundred—stirs the human marrow with hot pity and anger while coming near to freezing it with horror. Nineteenth-century literature, in protest against the indifference of a ruthless industrialism, is prolific of such passages, and there is hardly a humane writer in that great age of humanitarians who has not provided his or her chapter of outraged realism. Yet I would set this passage at the head of them all. —Ronald Mason, *The Spirit Above the Dust* [Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972], p. 71) と評している。
- 12) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *op. cit.*, p. 91.
- 13) *Ibid.*
- 14) Herman Melville, *Journals* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1989), p. 13.
- 15) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *op. cit.*, p. 95.
- 16) 『モービィ・ディック』のテキストは Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale* (New York: The Modern Library, 1944) を使用し、引用には章と頁数を付した。

参考文献

Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.

- Auden, W. H. *The Enchafed Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.
- Berthoff, Warner. *The Example of Melville*. New York: The Norton Library, 1972.
- Bowen, Merlin. *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*. Chicago: The University of Chicago Press, 1960.
- Braswell, William. *Melville’s Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study*. New York: The Macmillan Company, 1949.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville’s Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- 林 信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂，1958。
- Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1955.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.
- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.

- 酒本雅之『砂漠の海—メルヴィルを読む』東京：研究社，1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店，1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.
- Wright, Nathalia. *Melville's Use of the Bible*. Durham, N. C.: Duke University Press, 1949.

要 旨

メルヴィルの私小説風のフィクション『レッドバーン』は、未熟ないなか者の青年が船乗りとなって初めて航海をし、不況時代の冷たく醜悪な世間を目の当たりにする道程を扱っている。しかし、物語が進展するにつれて叙述と描写の焦点は、青年の開眼物語から開眼の対象へと、つまり、冷酷で忌まわしい人間世界、そして船員たちのリーダー的存在のジャクソンに人格化され具現化された人間嫌悪と人間世界に対する憎悪へと移る。

この作品の主題は、世間知らずの青年による現実と悪に対する開眼というよりは、貧困が直面する無慈悲な現実それ自体であり、さらに、ジャクソンに体现されているところの、そうした現実に対する邪悪な対応姿勢である。作者は極貧の事例に照準を合わせてクローズアップし、リヴァプールの貧民や乞食たちの悲惨さ、悪業、悲哀と死を、そしてアメリカへ向かう船内で疫病に襲われるアイルランド出国移民たちの悲惨な窮状を生々しく描出している。物語が終局に向かい、帰航途上の船内で発生した疫病と苦しみが終息し、ジャクソンが死んで彼の憎しみが消えた時、船員たちと「私」は解放される。